## 深い学びのために
## 学習のポイントの解答例

**1　作中人物がどう呼ばれているか確認してみよう。それは、人物がどのように捉えられているからか、彼らの言動と合わせて考えてみよう。**

**【答】**　顎鬚、イガクリ、電気屋というように、見た目の特徴や職業で呼ばれている。人間が統一的な人格というよりは、ひげや髪型という部分でしか認識されておらず、電気屋は職業的な役割としてしか捉えられていない。写真班が「彼」を無視して写真を撮る、電気屋が不要なブザーを売りつける行為は、「命ぜられて、家を撮影する責任がある。それでお給金をもらっている…義務がある」（二二四・6）、「あなたの義務ですよ」（二二六・7）など、仕事や義務、利益にのみ忠実であることが示されている。そうした人間らしさの喪失が、部分化、職業化した呼び方と関連して強調されている。

**2　「小さな玄関だなあ」（二二二・13）「おもしろいところに台所があるな」（二二三・12）「ずいぶんごちゃごちゃと樹が生えているねえ」（二三〇・12）などの写真班の家に対する評価は、なぜ「彼」を不安にさせるのか、考えてみよう。**

**【答】**　これらの批評によって、「彼」の家が、一般的なあり方から外れているのではないかと思わされるから。また、「彼」のものであるはずの家に対して介入してくるからには、相手が家に対して何らかの権利を持っているのではないかと思わされるから。

**▼ポイント▲**　写真班の家への評価は、否定的とみなせる（「おもしろい」も変わっているという意味で使用されている）。そのため、「彼」は現状肯定感を抱けない。

**3　「彼」の家の特徴を整理し、「彼」がどのように家を入手したかをまとめ、自分のものだと言い切れないことに、どのような事情がかかわっているか、考えてみよう。**

**【答】**　「小さな玄関だなあ」（二二二・13）、「狭い土間」（二二三・7）、「廊下も狭い」（二二三・9）、「たかが十四五坪程度のコマギレ住宅」（二二六・4）など、何回も小さい家であることが指摘されている。その小さな家を、彼は借金して手に入れている。彼の家族関係などは一切わからないが、家は、家族から受け継ぐようなものではなく、無理をして買わなくてはならない状況なのだとわかる。家は画一化し、歴史的な愛着が抜けており、借金をしていることからも、自分のものだという確信が持てなくなっている。

**▼ポイント▲**　「家」は、自分らしくいられる心的空間であり、同時に質量があり、売買されるモノでもある。その矛盾や、この時期の家族形態や住宅事情の変化などが、「彼」の不安を招来していることを理解する。

**4　写真班のエピソードと、電気屋のエピソードは、どのような関係になっているか、内容の類似や相違、語られる順番などから整理してみよう。また、両者が描かれることには、どのような効果があるだろうか。**

【答】　どちらも、「彼」が望まないことを、理屈をつけて無理強いし、人の持つ権利や義務について考えさせる点で類似している。ただし、電気屋がブザーをつけたことにより、写真班に対応するはめになったという因果関係もある。これらは、エピソードが起こった順番に語られるのではなく、写真班が来た際に、電気屋が来た過去が思い出され、関連付けられていくという形式によって両立している。二つのエピソードが畳みかけるように描かれることで、「彼」の不快感は倍増している。また、単発的な出来事ではなく、社会の傾向として示すことに効果を上げている。

**▼ポイント▲**　内容だけでなく、できごとが語られる順番に注意し、「彼」の焦燥感の倍増がどのような表現の工夫によって印象づけられているのかを考える。

**5　「ソバ」が出てくる箇所を抜き出し、どのようなことを表しているか、考えてみよう。**

【答】　「ソバは伸びて…気持ちが別にある。」（二一九・5）
「思い切ったようにまずい残りソバを…口の中に押し込んだ。」（二三〇・6）
「口いっぱいに…声にならなかった。」（二三〇・15）

まず、ソバは時間が経つと伸びるので、望まない客が来てなかなか食べられない時間の経過を表している。また、「彼」はまずくなっても食べなくてはいけないように感じており、最後は自分で口に入れたために声が出せない。自分にとって不愉快なことにも自ら従ってしまう人間の理不尽さや、そのことへの不安などを読み取れる。

**▼ポイント▲**　ソバは、気軽な食事として選ばれたはずである。それが不愉快な質感を増してくることで、日常を深刻な空間にしてみせる作品の小道具として、効果を発揮している。

## 言葉と表現の解答例

**1　「親指」「足」「肩」など、体の部位で作中人物の動きが表されている部分を探してみよう。それらは、どのような印象を読者に与えるだろうか。**

【答】
「ボタンを押し続けていたのは、顎鬚男の親指だった。」（二二二・3）
「イガクリも体を斜めにして、片足だけを踏み入れた。」（二二二・11）
「イガクリはしきりに手足や機械を動かした。」（二二四・14）
「上がり框に片足かけた。」（二二六・14）
「電気屋の残った足も上にあがってきた。」（二二七・2）
「電気屋は失笑して、右手を伸ばして彼の肩を押すようにした。」

（二二七・16）など。

解釈の一例として、手足などの部位が、人間の意志による統一から外れて動いているようであり、それは機械と並べられもする。映像や漫画のコマのような、描写のメリハリをつける表現でもあり、また、人間らしい感情のコミュニケーションが失われている印象も与える。

**▼ポイント▲**　「学習のポイント」1と合わせて、全体が無機的に感じられる表現の工夫を考える。

## 言語活動の解答例

### 1　時代状況が表れている部分はどこか、また、それが作品のテーマとどのようにかかわっているか、話し合ってみよう。

**【答】**　生徒の発言の中から、読解を深めていく活動。①用事のある人が電話やメールの先触れもなく直接訪ねてくる。②玄関のブザーが現在のようにモニター機能がついていない。③借金して家を新築している。などが挙げられる。①や②で、テクノロジーが現在に比べると発展段階であることは、人と人が顔を合わせる昔ながらの付き合い方がより多く残っており、機械を通した人間関係の画一化への違和感が大きかったことを考えさせる。③は、借金を返済できる未来までの時間、お金を作るために働き続けられる環境が前提であり、経済的に成長しつつあった日本の状況が推察されるが、そのために人々が労働に縛られている状況だとも言える。自分の存在への不安感は、どの時代でもあると言えるが、ここでは特に、大きな社会のシステムに巻きこまれることで生じる人間の不安であり、特定の歴史的状況もかかわっていることを考えさせる。

### 2　自分の行為が他人に決められていると思うのは、どのような場面か、話し合ってみよう。

**【答】**　グループ活動などで、日常的な選択や意思決定の具体的な経験を出し合う。自分の経験でなくても、歴史的な状況を想像するなどでもよい。例えば学校などの集団生活の場では、全員の利益のために、各自の行動があらかじめ決められた選択肢から選ぶことしかできないことがある。買い物や社会的なサービスについても、提供者の都合に沿って選択するしかない。進学などについても、社会的な動向やイメージ、保護者の意向によって選択の範囲があらかじめ決められているように感じることもあるだろう。そうした経験はだれしも持っている。また、歴史的な状況としては、国民の義務や、国家的な制度の変更などが考えられる。

個人の選択と、大きな社会のシステムとの関係を意識し、個人にとってそうしたあり方が、楽なのか、不自由なのか、仕方がないのか、自分にとって居心地よくする方法はないのか、などについて話し合ってみる。

（尾崎名津子）